

宇津保物語における場面と時間

—— 行事と歌群との機能 ——

豊 島 秀 範

- 一、序——レジюмеにかえて——
- 二、行事の種類と数量
- 三、現在完了の巻——俊陰・忠こそ——
- 四、求婚譚(一)——巻の特徴——
- 五、求婚譚(二)——年中行事と歌群の機能——
- 六、求婚譚(三)——再度、年中行事——
- 七、吹上・下の巻——再度、歌群——
- 八、求婚譚の收拾と仲忠の物語の始動
- 九、仲忠・琴の物語と政争の物語
- 十、まとめ

一、序——レジюмеにかえて——

『源氏物語』以前に成立した唯一の長編『宇津保物語』は、物語が長編化してゆく事情を知る上に、きわめて重要な示唆を与えてくれる。そこでこの小論は、八物語史／考究の一環として、宇津保が長編物語として発展していく経緯を、通過儀礼・年中行事、および夥しい数の歌群な

どを通して、考察しようとするものである。

宇津保物語には、周知のように、文字の錯簡・重複や、巻序の乱れ、内容の矛盾といった問題があり、作者や成立年代についても未だ説が定まっていない。それは多くの場合、物語の常ではあるが、宇津保の成立に複雑な事情が存在したことに原因があろう。内容面でも、琴の秘曲伝授、あて宮をめぐる求婚譚などの説話、立太子に絡む政争などが、渾然とは融合されておらず、わずかに琴に纏わる部分が首尾呼応しているにすぎない。ほぼ同時代に継子物語の一型として完成している落窪物語と比べても、宇津保の不備が目につく。それも、最初の長編物語として誕生する過程での、思考錯誤の結果生じたものであったろう。こうした問題を内蔵してはいるが、四代の御世、ほぼ九〇年間にも及ぶ長編として、宇津保は成立したのである。

ところで、その長きに渡る物語世界を形成し、維持したものは何であったか。竹取物語に見た妻争い説話の長大化、また四代に渡る琴の伝授という構想、そしてその結合、それらが物語を長編化させた最大の要因であることには相違ない。だが、宇津保が竹取と異なる点は、現実に取りえた立太子に絡む政治的対立を扱ったプロットに象徴されるように、より現実的な素材を物語に投影しようとする意識が認められることだ。巻と巻との関連では、源氏物語などのように緊密なものとなっていないところもあり、年立の上で錯綜しているのも確かである。しかし、それを含みながらも、より現実的な素材の投入によって獲得した時間の流れの上に、リアルな物語世界を築こうとする意図は充分に窺われるのである。

そうした視点から宇津保を読むと、一年間の季節や月日を明確にする機能を持つ年中行事や、人間が生涯において年齢の増加と共に経験する通過儀礼、および晴の場の象徴である詠歌の一群などが実に多いことに気づく。いったいそれらの果たす機能とは何であったか。結論的に言えばそれらは現実生活の場で絶えず執り行われていたこと。そして、それらを物語中に描写することで、物語の場面構成、および時間の推移にリアルな様相を与え、ひいては物語の長編化にも貢献しているということである。換言すれば、一年の季節・時間に対して作者が体験的に得ていた思考態度の、物語への投影現象とも言える。以下、本文に即して、それを具体的に説いてみよう。

表 (一)

			通過儀礼	年中行事	公 事	臨時の行事
○	1	俊 蔭	11	3		2
	2	忠 こ そ	7	3		1
△	3	藤 原 の 君	7	1		2
△	4	嵯 峨 院	3	10	1	
△	5	梅 の 花 笠	1	1	2	4
	6	吹 上 上	7	6		2
	7	吹 上 下		4		2
△	8	祭 の 使		6		2
△	9	菊 の 宴	1	15		4
△	10	あ て 宮	7	1		
△	11	初 秋		13		
△	12	田鶴の群鳥	8	1		1
○	13	蔵 開 上	18	2		1
○	14	蔵 開 中	4	6		
○	15	蔵 開 下	2	13		
×	16	国 譲 上	9	4		2
×	17	国 譲 中	5	7		2
×	18	国 譲 下	7	11	5	4
○	19	楼 上 上	1	5		3
○	20	楼 上 下	1	16		4
合		計	99	128	8	36

(注) ○印は仲忠一族に関する物語の巻。

△印は求婚譚を語る巻。

×印は政争を語る巻。

宇津保には、年中行事を初め、誕生から死に至るまでに行われる通過儀礼、即位・退位・立太子などの公事、随意に行われる法華八講・寺社詣などの臨時の行事がある(注1)。その内訳は、年中行事(128例)・通過儀礼(99例)・公事(8例)・臨時の行事(36例)で、総数は271例を数える。表(一)は、巻ごとの分布情況を示したものである。

二、行事の種類と数量

表(一)で明らかなことは、次の二点である。

一、年中行事と通過儀礼との数が極めて多いこと。

二、年中行事の数が多く巻には通過儀礼が少なく、逆に、通過儀礼の数が多く巻には年中行事の数が少ないこと。

右の二点から、年中行事と通過儀礼とが、宇津保の作品構造を知る上にかなり重要な要因であるらしいこと、および、二つの行事はそれぞれ異った役割を担っているらしいこと、がまず考えられる。さらに細かく見てみると、仲忠一族の物語である蔵開三巻と、政争を扱った国譲三巻とに顕著なことは、各々の上巻に通過儀礼が多く、下巻に年中行事が多いことが指摘できる。同趣のことは、あて宮求譚を描く一連の巻で、最初の藤原の君の巻と、ほぼ求婚譚の終局を迎える菊の宴の巻との関係についても言える。この傾向は、実は物語内容と深く関わる。そのために行事の種類・数を見ることが、各々の巻の持つ機能がかなりわかってくる。そこで、物語の構造を明らかにするために、行事から見られる特徴と物語内容との関係を考えて、次の五つに分けて検討を加えていく(○印の中の数字は巻序を示す)。

- (一) ① 俊蔭・② 忠こそ
- (二) ③ 藤原の君・④ 嵯峨院・⑤ 梅の花笠・⑧ 祭の使・⑨ 菊の宴
- (三) ⑥ 吹上上・⑦ 吹上下
- (四) ⑩ あて宮・⑪ 初秋・⑫ 田鶴の群鳥
- (五) ⑬ 蔵開・⑭ 国譲・⑮ 楼上下

三、現在完了の巻——俊蔭・忠こそ——

むかし、式部大輔、左大弁かけて清原の王ありけり。御子腹にをのこ子一人持たり。その子、心のさときこと限りなし。

へむかし……けり」の冒頭文(注2)によって起筆された俊蔭の巻は、続いて主人公・清原俊蔭を紹介する。俊蔭は一六歳の時に遣唐使の一

(本文は日本古典文学大系本により、随意漢字を当てた。以下同じ。三五頁)

員として渡唐の折、烈風のため波斯国に漂着し、そこで仙人から琴を習う。帰朝後、娘にその秘曲を伝え、俊蔭は死す。俊蔭の娘は太政大臣の子息兼雅と契り、男子（仲忠）を出産。仲忠は元服し、やがて侍従となる物語である。

この巻に描かれた通過儀礼は一一例である。

- (A) 俊蔭元服。俊蔭故父母のため服喪。俊蔭結婚。女子誕生。俊蔭妻の死。俊蔭逝去。
- (B) 俊蔭の娘と兼雅の結婚。男子出産。侍女の死。仲忠元服。
- (C) 嵯峨院の御賀（回想）。

一二歳で元服した俊蔭は、父母の死・結婚・女子誕生・妻の死を経て、俊蔭自身の死によって巻の前半で姿を消す。後に蔵開三巻で、孫の仲忠によって俊蔭の遺文が天覧に供される話で再浮上するが、俊蔭自身の物語——仙人から琴の秘曲を授かり、子孫に伝授する説話——は、ここで終了する。その意味で、いわば現在完了の形をとる巻であると言えよう。

巻の後半は俊蔭の娘に話に移り、(B)のように、兼雅と結婚、男子（仲忠）出産、侍女の死、仲忠元服と続くが、俊蔭の娘は死に至らない。そこが俊蔭と娘との違いである（注3）。仲忠が元服を迎えたことで、仲忠を中心に、その父母（兼雅夫婦）により形成される物語の基盤は、ここに成立したのである。

通過儀礼は誕生から死に至るまでの成長過程を示すが、それは同時に、人物相互の系譜的関係をも明らかにする。登場人物の出自を明確に位置づけようとする意図のあらわれである。琴の奇瑞に纏わる伝奇的内容で開始された宇津保が、以降の物語世界で、同じく伝奇物語といわれる竹取物語とは異質な、よりリアルな物語を構築し得ている理由はそこにある。

物語年数の不明な竹取と比べて、俊蔭の巻が七六年間の長い歳月を描き得たのは、琴が俊蔭の死後、その子、孫へと継承されていくという、いわば世襲の観念が体験的に作者の脳裡に刻まれていたからであろう。現実には当然起る人の死を物語に持ち込み（注4）、主人公を逝去させることで俊蔭の物語は終局を迎えた。主人公の物語は完了した。しかしまた、その子の結婚、男子出産、元服と話を繋いでいくのである。その連結の上で、通過儀礼の記述がいかに効果的であるかを理解することができる。

俊蔭の巻末に描かれた三例の年中行事——司召除目・五節・相撲の還饗——は、元服した仲忠が貴公子の一人として晴の世界に登場する契機

となった。一八歳の年の除目で侍従となり、昇殿を許された仲忠は、その年の五節の試楽で俊蔭、その娘（仲忠の母）と伝わる琴の秘曲を奏でる。翌年八月の兼雅主権の相撲の還饗は、以後も度々物語中に回想される程に盛興を極めた行事であったが、そこでも、

仲忠少しかき出でたるに、大殿のうち響き満ちていみじきを、ゆいこく、こかの手みつを、声の限りかき立てて弾き給ふに、いとどありとある人めでまどひて（下略）。（二二二頁）

と、結局は仲忠の彈琴への賛嘆に収斂されていく。俊蔭の巻は以上のような構造であったが、それとほぼ同様の形が、忠こその巻にも認められる。

かくて、また嵯峨院の御時に、源の忠恒と聞ゆる左大臣おはしけり。また右大臣橘の千蔭と申すおはしけり。世の中に、かたち清げに、心賢き人の一にたてられ給ふ。（二二二頁）

忠こその巻の冒頭部分である。俊蔭の巻との関連で八かくてVと受けているが、八けりVで止める冒頭文の型、および主人公を引き続き紹介する記述を含めて、俊蔭の巻頭部分と極めて類似する。まず、忠こその巻の通過儀礼を追ってみると、

(A) 橘千蔭の結婚。男子（忠こそ）誕生。妻の死。その法要。千蔭薨去。

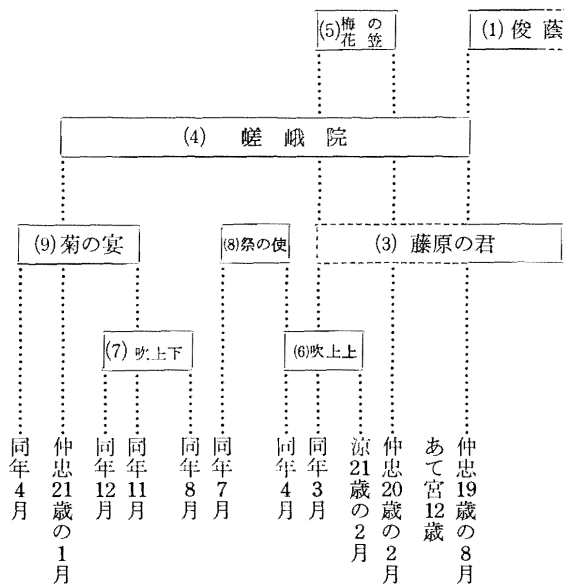
(B) 左大臣源忠恒薨去。

(C) 忠こそ、あこ君と契る。

となる。千蔭が四五歳の生涯を閉じると同時に、忠こその巻は終幕となる（A）。その点ではむしろ巻名を八千蔭Vとでもする方が相応しい。物語が開始されて間もなく、千蔭の妻は死す（A）。左大臣忠恒も薨去し（B）、残された北の方が、様々に策を勞して千蔭に言い寄る場面が、この巻の中心をなす。北の方の術策は功を奏することなく終わるが、忠こそその策略にまき込まれ、世をはかなみ、一四歳で出家する。忠こそは後にも数度物語に登場するが、主要人物として活躍することはない。

夫に先立たれた女が、妻を亡くした男に思いを寄せ、その願いを何とかして遂げようと手を尽す特異なテーマと、その両者の間で悩み、仏門に入る子供の姿を描くのが忠こその巻の主眼であった。そして、千蔭の死は、テーマに関わる要因のほとんどを同時に消し去った。その意味で忠こその巻も、やはり現在完了の形をとる巻と言える。忠こその巻が俊蔭の巻の縦の並びではなく、年立の上で平行する時間を持つ横の並びと

四、求婚譚(一)——卷の特徴



なお、五月の節会・内宴・大嘗祭の三例の年中行事は、北の方に術策をめぐらす場を与えた。俊蔭の巻で仲忠が琴の妙技を被瀝する場となつた五節・相撲の還鑒と同様に、プロットの展開に契機を与え、効果的で説得力のある場面の設定を意図してのことである。年中行事に依つて、説話の進行がなされているとも言える。

上・下は、下巻の最後でようやくあて宮求婚説話に接続する場面があるのだから九卷菊の寢までの年立を略図したのが図(一)である。その中で第六・七巻の吹で、当初から求婚譚を語る巻として書かれたとは認め難いので、比較の都合上、便宜的に触れるに留め、後に改めて取り上げることとする。

図(一)でわかるように、あて宮求婚譚は、藤原の君・嵯峨院・菊の宴の三巻で、時間的には覆われている。梅の花笠・祭の使二巻は、嵯峨院の巻と時間的に並列で、いわゆる横の並の巻である。さらに吹上上・下二巻を含めると、藤原の君・祭の使・菊の宴の三巻の間隙を縫う形で並んでいる。求婚譚に絡むこれらの巻は、実に複雑に組み合わされているのがわかる。以下、各巻の関係を考察するが、吹上の巻は後に触れるとして、残り五巻に描かれた行事数を、表(一)から抜き出してみる。

藤原の君	嵯峨院	梅の花笠	祭の使	菊の宴
通過儀礼	7	3	1	1
年中行事	1	10	1	14
公事	1	2		
臨時の行事	2		4	4

この表に著しい特徴は、藤原の君に通過儀礼が多いこと、残りの巻には年中行事が多いことである。梅の花笠（春日詣）はやや例外だが、公事・臨時の行事で六例があり、藤原の君とは異質であることが明らかだ。

七例の通過儀礼を描く藤原の君の巻は、あて宮求婚話の首巻として相応しい。

昔、藤原の君と聞ゆる一世の源氏（藤原正頼）おはしましけり。童より名高くて、容貌、心、魂、身の才、人に勝れ、学問に心いれて、遊びの道にも入りたち給へる……。（一五九頁）

△昔……けり△の冒頭文は説話の起筆の型である。俊蔭・忠こそと同じく、新たな説話の初発を意味する。しかも、物語が開始された直後に、

(A) 藤原正頼の元服。太政大臣の娘との結婚。女一宮との結婚と三日夜の祝。

(B) 正頼の男子の元服、女子の装着。

と話は一気に正頼の子供達の代へと及び、各々の結婚、加階という、正頼一家の繁栄を語る。藤原の君の巻は約五〇年間の歳月を含む。しかし、正頼は死去せず、むしろその子あて宮の求婚譚を宰領する立場にあり、物語の最後までそれが続く。そこに俊蔭・忠こそ両巻との違いがある。質的には違いがあるが、長い歳月をコンパクトに記述し、過去を引き摺る形で人物を登場させる方法は、俊蔭・忠こそ・藤原の君に共通しており、それはこの作者の創意工夫であったはずだ。

藤原の君の巻で、実際に求婚譚が展開されるのは、わずか六ヶ月の期間である（注5）。求婚譚は次の一文で開始された。

かくて、いづれともなくけり（清）らにおはしましける中に、あて宮は御年十二と申しける。二月に、御裳たてまつる程もなく、大人になり出で給ふ。（一六六頁）

正頼の九の君として生い出で、一二歳で成女戒を行うのを契機に、あて宮は紹介され、それと同時に懸想人達が次々に登場する。実忠・兼雅・平中納言・兵部卿宮・仲純・上野宮・三春高基・三の親王・行正・滋野真菅そして春宮と、実に多くの人物が数度に渡って、合計約六〇首の求婚歌をあて宮に贈る。（あて宮からの返歌はわずかに九首である。）この六〇首の歌は、正頼一家が賀茂川で催した△七夕の節供△（注6）の場での

一五首を筆頭に、後に表示するように、一二・一〇・八・五首などと、まとめて歌を羅列する（注7）。懸想人の中には、あて宮と思ひ込んで別の女を掠奪した上野宮や、気を引こうとして極端に華美な生活にはした三春高基、奇異な言動の太宰帥滋野真菅などの挿話は、竹取の五人の求婚者に真似たとも思われ、求婚説話に内在する△を△的要素の共通性も認められる。しかし、多くの求婚者を一挙に登場させる方法は宇津保の作者の創意であった。それにより華やかさが増し、同時に、物語空間は拡張された。しかも、恋歌贈答の機会を与え、一年のサイクルのある特定の月日を明示し、その月日によって想起される現実生活での経験的記憶に繋ぎ止めることで、物語が伝奇物語となることを防いでいるのが、正頼一家の主催した△七夕の節供△に象徴される年中行事なのである。この傾向は、嵯峨院以降の巻に一層顕著である。

五、求婚譚(二)——年中行事と歌群——

藤原の君で求婚譚が実際に展開されたのは六ヶ月間と短い期間であったが、以降の四巻でも、

嵯峨院（一年六ヶ月）・春日詣（二ヶ月）・祭の使（四ヶ月）・菊の宴（六ヶ月）

となり、嵯峨院は一年を越えるが、他の三巻は極めて短期間である（因に、吹上は、上巻（二・五ヶ月）・下巻（四ヶ月）である）。そして、ここでの求婚説話の世界を形成するものは、夥しい数の歌群であり、その歌群を据える場を設定し、物語に新たな時空を設けるべく時を刻むものは、多数の年中行事である。

新たな説話が始まる度に、通過儀礼の記述によって明示される系譜、その系譜の最後にあて宮は登場した。そのあて宮をめぐる求婚譚に登場する人物、および型は、藤原の君の巻ではほぼ尽きている。嵯峨院の巻以降に登場する主要人物はおらず、エピソードも限られている。求婚説話は藤原の君の巻に描かれた求愛歌の羅列の型を繰り返すしか術がなく、事実そうである。ここで宇津保の歌数を表にして示してみる。

（表(二)参照）

表 (二)

		歌数	一頁当りの歌数	一度に五首以上の歌群
1	俊 蔭	19	0,30	⑪
2	忠 こ そ	20	0,57	⑨
3	藤原の君	74	1,17	⑤⑤⑧⑩⑪⑫
4	嵯 峨 院	44	0,92	⑧⑩⑪⑫
5	梅の花笠	69	2,30	③⑩⑫⑤⑥
6	吹 上 上	72	1,47	⑬⑦⑪⑧⑩⑫
7	吹 上 下	47	1,74	⑨⑥⑩⑦⑬
8	祭 の 使	88	1,91	⑮⑫⑪⑨⑪⑦
9	菊 の 宴	124	1,65	⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲
10	あ て 宮	30	0,94	⑨⑥
11	初 秋	64	0,67	⑤⑤⑧⑦⑥⑦⑪
12	田鶴の群鳥	20	0,71	⑫
13	蔵 開 上	40	0,44	⑪⑫⑨
14	蔵 開 中	23	0,43	⑥
15	蔵 開 下	30	0,46	⑤⑧
16	国 譲 上	32	0,37	⑤
17	国 譲 中	53	0,60	⑥⑤⑥
18	国 譲 下	53	0,44	⑨⑥⑫
19	楼 上 上	23	0,29	
20	楼 上 下	28	0,32	
合 計		953		

表(二)で明らかなように、藤原の君(七四)・嵯峨院(四四)・梅の花笠(六九)・祭の使(八八)・菊の宴(一二四)と、この五巻で合計三九九首となり、全体の歌数の半数弱を占める。しかもその大半は、あて宮への求婚歌であるということは実に驚くべきである。求婚譚以外の巻では、一首以上の歌が羅列されるのは、極めてわずかである。それがこの五巻に限っては実に多く、機会を得ては数十首の歌群が度々羅列される。その結果求婚説話は量的にはいくらかでも膨張拡大するわけだ。

歌の羅列は、その量をもって物語を長編化させる要素には成り得る。だが、それがただちに竹取に見た伝奇物語の域を越えることには直結しない。また、通過儀礼の詳述で、過去との繋がりを示すことにより、登場人物に実在感を与えることで、よりリアルな物語世界の描写に意を注いできたと思われる作者が、ただ歌群による場面の増加が、ここでの意図であったとも思われない。ここでも、現実的世界を物語の中に構築すべき努力がなされたと思わなければならない。その一翼を担ったのが、以下に列挙する年中行事を主とする各種行事の一群であった。(○印は年中行事。(一)内は公事・臨時の行事。△内は回想などで記された行事。また、一連の月日を見通す都合上、吹上の巻の記事も加えてある。)

○七夕の節供	7月	藤原の君	○納涼会	6月12日	〃
○相撲の還饗 (斎宮の御迎え)	8月	嵯峨院	○夏越の祓	6月17日	〃
○月の宴	9月	〃	○夏神楽(桂川にて) (難波の浦にての祓) (旅籠ぶるいの饗)	〃	〃
△花の宴のこと▽ ――新年――		〃	○七夕の節供(舞踏)	7月	〃
○賭弓の節会	正月18日	〃	○庚申待	7月7日	〃
○子の日の祝	正月乙子日	〃	○花の宴(萩)	7月庚申日	〃
(嵯峨院退位、朱雀帝即位)		梅の花笠 (春日詣)	○嵯峨院、吹上へ御幸)	8月20日	吹上
(春日詣)	2月20日	〃	○重陽の節供	9月	〃
△賀茂の臨時祭のこと▽ (春日詣の還饗)	2月23日	〃	(帝、神泉苑へ行幸)	9月9日	〃
△賭弓の節会のこと▽	3月	〃	○紅葉の賀(神泉苑にて)	9月	〃
○花の宴(桂殿にて)	3月	〃	△熊野詣のこと▽	11月1日	菊の宴
△正月の節会のこと▽	3月3日	吹上	○残菊の宴	〃	〃
○三月三日の節供	3月3日	〃	△更衣のこと▽	〃	〃
○花の宴(林の院にて)	3月上巳日	〃	△神泉苑へ御幸のこと▽	〃	〃
○上巳の祓(洛の院にて)	3月20日	〃	○新嘗祭	11月中卯日	嵯峨院
○藤花の宴(藤井の宮にて) (惜春の宴)	3月晦日	〃	○五節(舞姫)	11月中丑、卯日	〃
○更衣	4月1日	〃	○新嘗祭の小忌	〃	〃
(送別の宴)	〃	〃	○賀茂の臨時祭	11月下酉日	〃
○賀茂祭の勅使	4月	祭の使	○賀茂の臨時祭	〃	吹上
○五月五日の節供	5月5日	〃	○御神楽	12月13日	菊の宴
(舞踏・競馬・騎射・駒形・毬杖)		〃	△相撲の還饗のこと▽ (雪の賀)	〃	〃
			○歳末の御読経・御仏名	12月	〃
			――新年――	〃	〃

平安時代の前期に、宮廷を初めとして繰り広げられた年中行事の実数は、右に列挙した数をはるかに越える。しかしながら、わずか一年一〇ヶ月の期間を描いた物語の中に、約三〇種、四四例の年中行事があること、公事・臨時の行事を加えると、六〇例を超える行事数が描写されている事実は驚くに値する。その中には、賭弓の節会、子の日の祝、花の宴、上巳の祓、賀茂の臨時祭などの行事が重複しており、特定の催しに寄せる当時の関心の程度が窺われて興味深い。それにしても、月を追いつを追って記述された夥しい数のこれらの行事が、物語世界の時間空間の構築の上に、いかに効果を發揮しているかは、容易に理解し得る。しかもこの手法は、宇津保の作者が初めて物語の中に導入した方法であることも確かなのだ。この行事と歌群とが組み合わせられて、求婚譚の場面は設定されていたわけである。

いくつかの具体例を、本文に即して述べてみよう。藤原の君の巻末で、正頼一家の主催する「七夕の節会」を舞台に、一五首の歌が列挙されたことは既述した。そのように、特定の行事を背景として、五首以上の歌が「求婚歌」として列挙されるのは、次の五例である。(一)内は、年中行事以外のもの。

(春日詣)・5首。七夕・15首(以上、藤原の君)。納涼会・11首。夏神楽・9首。七夕・7首(以上、祭の使)。

以上の四七首は、あて宮求婚の贈答歌である。同様に一つの行事を場としているが、求婚譚とは無関係な歌群を示すと、次のようになる。

(春日詣)・38首。花の宴・12首(以上、梅の花笠)。

花の宴・13首。上巳の祓・7首。花の宴(藤)・11首。(鷹狩)・8首(惜春の宴)・8首。(送別の宴)・16首(以上、吹上り)。

菊の宴・15首。紅葉の賀・17首(以上、吹上下)。

上巳の祓・29首(菊の宴)。

○参賀	正月元日	〃	上巳の祓・七夕・仏名のことなど▽		
○除目	正月7日	嵯峨院	△神泉苑へ行幸のこと▽	3月上巳日	〃
○賭弓の節会	正月18日	菊の宴	○三月上巳の祓(難波にて)		〃
○内宴	正月21日	嵯峨院	(夕べの歌宴)		〃
○子の日の祝	正月子日	菊の宴	○宇佐の使	4月	〃
△御賀(屏風の歌—正月子の日・	(1月)12月)	〃			

都合一場面、歌数合計一七四首と、極めて多い。これらは求婚譚とは無関係の歌群であった。にも関わらず、これ程に多くの歌群が出現することの理由は何か。それは、求婚説話に限らず、少なくとも宇津保物語の前半においては、物語場面を支える重要な要素として、これら歌群の描写があったということだ。

だが、ここで注目すべきは、求婚譚と無関係な歌群一一例中の八例までが、吹上の巻にあることである。このことは後にも触れるが、元来、吹上の巻はあて宮求婚譚とは関係のない説話として語り出されていたことの証左となろう。吹上の巻の記述の大半は、求婚譚を考える上では省いてよいのである。そうすると、この部分では三例のみが残り、決して多い数とは言えない。

以上は、一つの行事を背景とした場合であったが、次のような記述のされ方もある。

○新嘗会の頃、春宮よりかく宣へり。

○右大将の主、五節いだし給ひて、内裏参りの夜……。

○兵部卿の親王、小忌に当り給ひて、内裏より……。

○頭中将仲忠、臨時の祭の使に出で立つとて……。

○藤英は……内位(除目)給はり……内宴に召されて、あを色の衣を朱の衣に更ふとて思ふ。

嵯峨院の巻末にある一連の求婚歌一七首中のうち、五首のいわゆる詞書に相当する部分である。作歌の事情を記す所に行事名が組み込まれ、行事との関連で詠歌されている。新嘗祭・五節・小忌は一月中の丑・卯の日への一続きの行事である。それが一月下の酉の日の賀茂の臨時祭へと移る。さらには、内位(正月七日)・内宴(正月二日)の記事で、新年を迎えたことがわかるのである。同じく歌が列挙されているとはいえ、期間にすれば二ヶ月に渡る。同一の場での歌群とは自ら性質を異にするのである。また、梅の花笠の巻での、

○右近少将仲頼も……賭弓の御饗に(あて宮を)垣間見て後は、伏し沈み、病になりてありしを、殿の春日詣に……かく書きつけたり。

のように、過去の出来事と関連づけながら、求婚歌を詠む理由を語る部分にも、行事名は実に有効である。「源宰相、かく聞え給ふ」「兵部卿宮より」「平中納言殿より」「侍従の君」「行正、かく聞えたり」などの作歌主の表記の中にあって、右の行事名は、前巻嵯峨院との関連を強く想起させる効力を持つ。特定の行事を背景としての歌群でもなく、次の所で述べる行事と無関係に交された贈答歌群でもない、その中間に当

する方法である。この手法は、求婚譚の部分では先にあげた例だけであるが、宇津保の後半にはかなり採用された。求婚譚の部分でも、ほぼ終末を迎える場面にあることでもわかるように、ある意味では進歩した年中行事の用法であると思う。

求婚説話を形成する歌群には、もう一つの性質を持つものがある。行事とは無関係に恋歌を羅列する場合である。そして、その例は極めて多い。巻序に従って、五首以上の例を示す。(表(二)参照)

8首・10首・11首・12首(以上、藤原の君)。

8首・10首(以上、嵯峨院)。

13首(吹上下)。

15首・12首・17首(以上、祭の使)。

14首・34首(以上、菊の宴)。

一二場面、一六四首に及ぶ。菊の宴の三四首を筆頭に、一〇首以上の歌群が一〇場面に渡って展開されている。ひたすら求婚歌の贈答場面の叙述を目的とするこの方法は、まさに壯観ですらある。竹取物語が六人の求婚者を描く中で一三首の歌を採用したが、宇津保の比ではない。竹取の五人の貴公子のエピソードに比較し得るものが宇津保にもあることは既に述べたが、宇津保の求婚譚を形成するものは、その説話が中心なのではない。飽くなく繰り返される夥しい数の歌である。

この方法は、随意に場面の増加が可能で、種々の説話を挿入できる利点がある。その反面に、歌群によって構築された一つの場面から、次に設定される同趣の場面へと推移する上での、物語内部の必然性がほとんどないという欠点もある。求婚譚という外枠はあるが、ある一つの帰結に向って進行する脈絡が欠除している。つまり、あて宮が結果的になぜ春宮と結ばねばならないかという、物語内部の要請がない。そのために、菊の宴の巻に入ると、あて宮が春宮に入内するという噂が、突如として記された感じを受ける。かぐや姫が帝を拒絶したのは、天女であるという理由であった(注8)。しかしあて宮は、理由はともかくとして、最後には春宮へ入内するということが、文脈を超越してその基底にあった、と考えるしかない(注9)。あるいは、突然に入内が実現することで、他の求婚者の嘆きも深まるのだ、とも言えよう。事実それもある。だが、その効果は、充分には描かれていない。源氏物語が玉鬘十帖で見せた玉鬘をめぐる物語、また、宇治十帖での大君・中君および浮舟を登場させ

ての緊迫した筋の運びと比較するとき、最初から入内が当然のように受け取られる宇津保の求婚譚は、それがこの段階での限度であったのだ。菊の宴の巻末にある実に三四首に及ぶ贈答歌群は、入内決定後の失意の求婚者達が、最後の思いを述べた場面である。求婚歌群の中では最高の数を誇る歌群を以って、ほぼ求婚説話の幕は下ろされる。

以上のように、求婚譚は実に多くの歌によって彩られた。しかし、なぜにそれ程まで歌を採用したのであったろうか。それは先述したようにある行事を背景に、参集した人々が余興として歌を詠む、いわゆる歌会形式の集いが、その当時少なくなかったことの反映であろう（注10）。華やかな雰囲気があるそこには漂っていたであろうし、その場に参加できることは、大きな喜びでもあったろう。そこで得た体験を物語の方法として導入することは考えられてよい。また、歌に心情を託して贈答する習俗も、日常に存在した（注11）。そうした実情が、歌群の描写を多出させたと考えてよい。

求婚説話の中に歌を列挙することが、次にいかなる場面を要請するかという文脈上の問題以前のところ、特定の行事を場として歌を詠み合う、あるいは行事は無くとも歌会が催される（これも行事と言ってよいかもしれない）ことが、作者にとっては経験的実感であり、そのこと自体が価値と魅力とのある出来事だったのである。

六、求婚譚(三)——再度、年中行事——

求婚譚は一年一〇ヶ月に渡る記事であったが、ここで再度年中行事に視点を当ててみると、その期間に記されたその数は四三例であった。そして、そのうち次の一三例には全く歌がない。

○還饗・花の宴・子の日（賀）（以上、嵯峨院）。

○正月節会・花の宴（以上、吹上）。

○残菊の宴・更衣・御神楽・子の日（祝）・御読経・御仏名・参賀・賭弓の節会（以上、菊の宴）。

詠歌がない理由を、右に掲げた行事自体の特質に求めることはできない。どのような機能として行事を用いたかという、方法上の問題である。

たとえば次の例である。

○かくて、右大将殿（兼雅）に還饗し給ひければ、例のごとく左大将殿（正頼）もおはしける。

第四卷嵯峨院の冒頭文。△還饗▽とは、首巻俊蔭の巻末にあった相撲の還饗のことである。この記事により、嵯峨院の巻頭が、間の二巻を越えて、第一巻俊蔭の巻尾と同じ歳月を示すものとしていとも容易に接続されたのである。三重四重と巻が並列しているこの部分で、行事の課せられた機能はまことに重要で、かつ便利である。

また、還饗の具体的内容はここでは述べられておらず、それは吹上・下の巻頭文「かくて、八月中の十日のほどに、院（嵯峨院）の帝花の宴し給ふ」および菊の宴の巻頭文「かくて、春宮十一月朔日頃、残れる菊の宴きこしめしける」などにも見られるように、巻を新たに書き起こす上で都合のよい材料であった。このような巻頭文における程の重い役割はないが、場面を進める場合、たとえば、

○かくて、御神楽し給ふべき設し給ふ。

○かくて、賭弓に左（近衛の大将・正頼）は饗すべしとて……。

という具合に、次々に巡り来る行事を迫うことで、場面はいくらでも展開し得る。一三例中一〇例までが、年中行事に課せられたここでの機能だ。もとより年中行事であれば、これは全てに渡る要素でもあるわけだが、その一〇例中の八例までが菊の宴の巻の前半に集中する。その部分には歌は全く姿を消し、求婚譚も中止されているのである。あて宮を入内させる相談がなされたあと、話題の中心は正頼の御神楽と太后の六十の賀である。求婚説話の流れの中で、この部分は異質な部分である。それまで採用されてきた歌群によるパターンでは描けないこの部分の記事を書き進める際に用いられたのが、一月から正月に至る八例の年中行事であった。それに依って、舞台は回転し続けているのである。

七、吹上・下の巻——再度、歌群——

かくて、紀伊国牟婁の郡に、神南備の種松といふ長者、限なき宝の王にて、只今、国の政人にて、容貌清げにて、心づきてあり。
吹上・下の巻の冒頭文でいきなり長者種松が紹介され、続いて七例の通過儀礼によって、

(A) 大納言恒有の娘結婚。父恒有の死。娘の夫の死。

(B) 故恒有の娘と種松の結婚。女子誕生（後に女蔵人として出仕）。

(C) 女子と帝との間に源氏（涼）誕生。女子（涼の母）の逝去。

と、主人公源涼の出生とその系譜が一気に記される。涼の母はすでに亡く、父帝は涼の出生を知らないために、両親がないに等しい。その点では俊蔭・忠こそ両巻と同じく現在完了的な様相の巻である。だが、紀伊国に生い育ってはいるが、涼の素姓は高貴である。そして、長者種松に庇護されている。俊蔭・忠こそ両巻と違う所である。ただし、求婚譚の中に位置していることを考慮すると、内容的に異質な物語だけに問題は残る。

吹上巻は、涼の素姓紹介の部分で数十年の歳月を経過することになるが、巻の大部分を要して実際に描かれる期間は、涼二歳の二月下旬から四月までの、二ヶ月半である。さらにその大半は、三月三日から晦日までの一ヶ月間である。その内容は、松方・仲頼などの都人を招いて種松・涼が主催した、

○三月三日の節供・花の宴（桜）・三月上巳の祓・花の宴（藤）

の年中行事と、

○鷹狩・惜春の宴・送別の宴

の行事とを場として、合計六七首の歌による歌宴であった。求婚譚とは異質な物語ではあるが、行事を背景とする歌群によって、三月の行事を中心にして構成される吹上巻の特徴は、宇津保の構造を知る上で重要な記事だ。そしてこの趣向は、吹上巻でも同様である。

吹上巻は、同年の八月から二月までの四ヶ月に渡るが、ここでも実際には九月一ヶ月間の記事が、巻の大部分である。すなわち、嵯峨院行幸のもと、種松・涼の吹上の宮での△重陽の節会▽と、院の帰京後に、朱雀帝と院による神泉苑での△紅葉の賀▽とである。この二つの行事を場として、三二首が詠まれた。三月と九月との違いはあるが、一ヶ月という短期間に集中し、その月の年中行事を骨組みにして構想されたこの二巻は、同趣の構造である。これは、作者を初めとする当時の人々の、興味の在り方の表出であることは確か^かで、宇津保が多くの歌群を取り込んだ理由も、自ずと領解されよう。

吹上下巻は、嵯峨院・朱雀帝の登場、および、巻末で京の三条に涼が新居を構えたこと、さらに、忠こそ登場させて、あて宮への求婚歌一首の羅列によって決定的となったように、本来求婚譚とは無関係な説話として開始されたはずの涼・種松一族の物語が、ここで求婚説話に吸収された。そこに、いくつかの説話を統合しつつ長編化していく物語の実態を窺い知ることができる。

八、求婚譚の收拾と仲忠の物語の始動

ここでは、あて宮・初秋・田鶴の群鳥の三巻が対象となる。

藤原の君の巻に始った求婚譚は、菊の宴までの五巻と、吹上下巻の一部を費して、ほぼ終結した。あて宮は春宮へ入内する。一五歳の一〇月であった。入内したあて宮が、第一皇子に続いて、入内三年目の春に第二皇子を出産するまでの経緯と、懸想人達のその後の動向を語るのが、あて宮の巻である。続く初秋の巻は、春宮妃あて宮の父・正頼と、主人公仲忠の父・兼雅の両者が主催した八相撲の節会Ⅴを中心に据えた巻——この巻を「相撲の節会」とも別称する所以——である。節会を背景として、正頼夫婦の増選びがあり、正頼一家の繁栄を巻の前半で語る。後半では、仲忠の母を登場させ、帝の所望による弾琴の場面を描くことで、首巻俊蔭以来、久しく途絶えていた俊蔭・娘（仲忠の母）・仲忠と伝授された琴の物語を、再浮上させた。求婚譚と琴の物語とが結合されて、同時に、藏開の巻以降に展開する故俊蔭一族の物語が、ここに準備された。なお、正頼家の四人の増選びは、次の田鶴の群鳥の巻で、それぞれの配偶者が決定されて完了する。以上の三巻は、求婚説話を收拾し、仲忠の物語を始動させているわけである。具体的に述べてみよう。

三つの巻の関係は、二年間に渡るあて宮の巻と時間的に並列して、仲忠の母を語る初秋の巻があり、正頼の増選びがある田鶴の群鳥の巻がさらにそれらと重複する。期間の長さでは、あて宮の巻の内に、他の二巻が包み込まれる。しかし、実際には三つのプロットが同時に進行する。この種の構造は既に求婚譚の部分で見られ、吹上の巻を加えると、四重の複線構造をなしていた。そうなるに至った主な理由は、吹上の巻を除けば、短期間に多くの求婚者を様々な場に登場させるのに便利であること、および、一続きの巻に全ての場面を取り込んでいくよりも、いくつかの場面ごとに分けて描く方が効果的かつ印象的であったことによるだろう。並びの巻の存在理由の一つはここにある。目下の対象である三巻

についても、同様のことが言える。

あて宮の巻は、通過儀礼を通して語られる。

○あて宮内。第一皇子誕生。三日夜の御産養。五・七日夜の御産養。

○あて宮の第二皇子誕生と御産養。

入内以降、第二皇子誕生に至る、あて宮を中心とした物語は、産養という通過儀礼を骨格として、まとめて示される。年中行事は春宮主催の庚申夜の饗応の一例である。その場で春宮御前の歌会が催され、九首の歌が続くが、他には歌群はない。行事を背景とする歌群は、華やかにその場を盛り上げる効果はあるが、時間の推移を停滞させる。先に表(二)で示したように、あて宮の巻を境として歌数が減少していることでもわかるように、求婚譚を入内によって締め括り、第二皇子誕生までを一気に記述することに、あて宮の巻の目的がある。その場合に、通過儀礼が有効に働くことは、既に述べてきたことであった。

一方、あて宮の巻と並行する初秋の巻は、相撲の節会を場として仲忠の琴が話題にのぼり、その母の琴へと及び、俊蔭の巻での琴の物語を想起させ、蔵開以降の物語へと連続させていく。その中で、七月一日に帝・春宮・正頼の三者による八節会の物語がある。春宮が「年のうち出でくる節会の中に、いづれいと切にらうある、定め申されよや」と言ったのを受けて、まず、正頼が、

年のうちの節会どもはいづれもらうあれど。朝拝など聞召す時はいとおもしろく、内宴を聞召すもいとらうありておもしろし。三月の節会は花とく咲く時はいとらうあるほどなり。さて猶ことなる花などは咲かぬ程なれど、あやしくなまめきてあはれに思ほゆるは五月五日なむある。(中略)七月七日をかしうはあれど、ことなるおもしろきことは無くなむある(中略)。(九月)九日も吹上を思ふ給ふれば、いとこそらうあれ。それより後(の行事)は、(五月)五日には劣るとなむ思ふ給へらるる。

と答えている。さらにこれを受けて、帝が、

いとう定め給ふなり。思ひしことなり。更に年のうちの節会ども見るに、五月五日にます節なしとなむ思ふ。花橘・柑子などいふものは時過ぎて古りにたるも、珍らしきものひとへに交るなむいとをかしき。そこ(五日)にますもの無くなむ。

と答えた。五月五日の節会に寄せる非常な関心のほどが窺われる。強く支持された五日の節会を初め、朝拝・内宴・三月三日・七月七日・九月

九日など、人々の関心をひく行事は多く、菊の宴の巻で太后六十賀の折に詠まれた屏風歌一二首でも、月ごとに移りゆく年中行事に関わる歌が少なくなかった。

俊蔭の巻以後途絶えていた琴の物語を浮上させる契機として機能する相撲の節会、それは求婚譚に描かれた行事の多くにも同様であったが、場面の拡大や転換、それ以前のプロットとの接合などに、有効な方法であった。年中行事を様々な機能を持たせて物語に導入する基盤には、行事に寄せる並々な関心が存在したことを、右に引用した会話が明確に物語っている。それであればこそ、質の違う説話同志の結合を、行事を場することで容易に成し得る作者の心理も、理解できるのである。

なお、田鶴の群鳥の巻は、すでにあて宮の巻で語られていた懸想人達の動向を受けて、仲忠・涼を初め、まだ残されていた主要な人々の処理を急ぐ。

○仲忠と女一宮の結婚。涼と今こそその結婚。各々の三日夜の餅の祝。

○兵部卿親王と十一君の結婚。平中納言正明と十二君の結婚。良中将行正と十三君の結婚。右大将季房と十四君の結婚。各々の三日夜の餅の祝。

これらの通過儀礼の記述によって、求婚譚は完結した。

九、仲忠・琴の物語と政争の物語

仲忠の祖父・俊蔭の遺集文書を収める宝庫を開くという特異な着想の蔵開の巻は、初秋の巻で想起させられた第一巻俊蔭との関連を、一層明確にする効果を持つ。その遺文は、蔵開中巻で仲忠の手で天覧に供される場面が大きく描かれ、素材として重い扱いを受けてはいるが、蔵開三巻での最大のプロットは、蔵開上巻で仲忠と女一宮との間に女御子(犬宮)が誕生したことで、その詳細にわたる産産の儀式とである。それは、楼上の巻で、成長した犬宮が、俊蔭・その娘・仲忠と継承された琴の秘曲を伝授されて、華々しく披露することへと繋がる。一方、その中間に位置する国譲三巻は、藤壺(あて宮)の皇子と梨壺の皇子とが、立太子をめぐって対峙する物語である。

蔵開から楼上に至る八巻には、このように質の異なる二つのプロットが存在する。そして、その二つを一本化していこうとする作者の意図が窺われる。この八巻は、時間的にも並列することなく、直線的に進む。しかも、物語世界を支える通過儀礼や年中行事には、類似した傾向も認められる。つまり、表(一)で示したように、蔵開三巻では、通過儀礼の数が、上巻(18)・中巻(4)・下巻(2)と減少傾向であるのに比して、年中行事数では、上巻(2)・中巻(6)・下巻(13)と増加していた。この傾向は国譲三巻においても同じである。この類似は、ただの偶然ではない。宇津保の構造を知る上で重要なことなのである。

蔵開の巻にある主な通過儀礼を示そう。

○女一宮(仲忠の妻)の産屋の設。女御子(犬宮)誕生。御湯殿の儀式。犬宮三日夜の産養。五日夜の産養。女一宮の床上げ。七日夜の産養。藤壺より産養。中納言涼より産養。九日夜の産養。后宮より祝。梨壺より祝。麗景殿より祝。五十日の祝(以上、上巻)。

○三条殿での犬宮の産養(中巻)。

○犬宮の百日の産養(下巻)。

まるで女房の日記でも見るような、驚くほど詳細な産養の記事だ。特に上巻に集中しているのだが、この詳細な記事の持つ意味は、いったい何であるのか。これは国譲の場合とも質的に関連する。国譲では、

○梨壺の皇子誕生。三日後の産養。五日夜の産養。七日夜の産養。九日夜の産養(以上、上巻)。

○藤壺の産屋の設。第三皇子誕生。七日夜の産養。女一宮等よりの産養。九日夜の産養(以上、中巻)。

○承香殿に皇子誕生と産養(下巻)。

これ程までに産養の儀式を集中的に描く物語は、他に例を見ない。果たして、これらの記事の持つ意味は、結論的に言えば、その儀式を経て登場する人物の、物語における位置の重要性を、文脈からではなく、数量的具体的に示そうとするところにあった。

琴に関わる物語の最後を飾る犬宮、また、すでに誕生している藤壺の第一皇子と対峙する梨壺の皇子、両者はそれぞれにきわめて重要な位置にある人物だ。それを強調するために作者が採用したものは、産養という通過儀礼を通して、人々から大切に扱われているという、具体的な記述であった。それは、求婚説話において、夥しい数の歌群をもって華飾することによって、春宮入内の方へもっていった意識と、根底において

相通ずる。しかし、ここでさらに重要なことは、歌会がそうであったと同様に、産養についても、それを物語に導入するに足る行事としての実感が作者にはあったということ、そうすることで、物語によりリアルな世界を描き得ると信じていたと思われることである。

ところで年中行事については、蔵開の巻では下巻に一三例が集中する。犬宮の産養が一段落したところで、

○京官の除目。参賀（正頼邸・内裏・藤壺・梨壺）。司召の除目。賭弓の節会。内宴。踏歌。

と、主に正月の行事が続く。犬宮の百日の産養とも重なった司召の除目の行事を通してクローズ・アップされたのは、物語の主人公としての仲忠であった。そのことが犬宮の位置の重さにも繋がり、楼上の巻——特に下巻において、一年間に及ぶ実に一六例の年中行事の推移と共に、犬宮の琴の上達を贅える、豪華な場面が展開されるのである。まさに華やかな終幕といえる。

すでに述べたことだが、立太子争いに藤壺側が勝利を収めた国譲^下巻で描かれる、一一例の年中行事についても同様である。つまり、ひと纏りのプロットが終末を迎え、それ以上の展開が不要となった場合に採用されるのが、この方法であった。求婚説話の終局を迎えた菊の宴の巻の一四例の年中行事も、また然りである。この方法は、後の源氏物語にも幻の巻を初めとして用いられることとなった（注12）。

十、まとめ

通過儀礼・年中行事および歌群などを通して、宇津保物語の構造を検討し、それらがプロットの構想と形成において、どのように物語世界——場面と時間——に機能しているかを考察してきた。焦点をそれらに絞ったのは、たまたまそれらが多く目についたからではない。宇津保の作品構造を知り、物語が長編化していく実相を求める上に、それらが重要な要素であったからである。

物語がそれ自体の中に、独自の時間・空間を獲得し、自立するためには、いわば現実社会の実相を写実する段階を越えて、物語内部から必然的に紡ぎ出される内的要因により、筋の展開が推し進められねばならない。換言すれば、物語に採用した素材が、主人公をめぐって有機的に連続しなければならぬ、ということである。つまり、作者の意図が、例えば説話レベルでの一定の規律に従って、表面に現われる形で物語を牽引するのではなく、作者の意図はあくまでも物語の内奥に沈潜していて、必然的に問われる物語内部の要請によって、筋は展開されなければな

らない。

宇津保の場合は、既に述べてきたことでわかるように、充分にはその域に到達していなかった。年中行事を背景として場面の進展をはかることは当然あってよいが、それも筋の必然的な推移があつてのことである。だが、極めて多い年中行事の数が物語るように、正月から二月、三月へと場面を進めるためにのみの行事も多かった。また、歌群の多出も、求婚譚の拡大には繋がるが、歌群によって描出された場面相互の関連に欠けた。同じ趣向の繰り返しばかりが目に付くのである。それは、通過儀礼によって語られる場面にもいえる。

そのように欠点を指摘することができるが、他方において、通過儀礼を通して位置づけられる人物、また、年中行事に従って刻まれる時間、さらには多くの歌群が詠出される華やかな場面、それらは全て、作者の感性によって写し取られた、それなりに現実的実感のこもった方法であつたのである。

また、三重四重に重複する巻と巻との関係でも明らかのように、いくつかの説話を集合しつつ、一つの物語へとまとめていった複雑な情況が、宇津保にはある。初秋の巻あたりから一本に統合していこうとしており、その意味では、物語の方法に一つの進歩をみる。物語全体の構造の不備と、緊迫した筋の展開に欠けるのは事実で、この点では源氏物語の出現を待たねばならなかった。

しかしながら、伝奇物語の域をようやく脱却して、リアルな物語世界を築こうとした意図は明白であつた。不備ながらも多数の行事や歌群を描いた作者の意図もそこにあつた。そしてこのことは、物語が長編化していく初期の功績として、決して小さなことではなかった点を認識しなければならぬ。

(注1) 行事を四種類に分類したのは、倉林正次先生「源氏物語の年中行事」(『源氏物語講座』第六巻・有精堂)での方法を参考とした。

(注2) 八むかし……けりVの冒頭文を持つ巻は、他に忠こそ・藤原の君・吹上上があり、それらは各々独立した説話であつたことの根拠である。

(注3) 宇津保が当初から現存本の形であつたかどうかは不明だ。三谷栄一先生は、「宇津保物語―成立事情とその増益―」(『物語史の研究』有精堂)で、最初に書いた俊隆の巻は人氣がなく、後に出した藤原の君が人氣を得たので、それを中心に改めて書き直したと言われている。

(注4) 源氏物語は、桐壺更衣・帝・紫の上を初めとする人物の死を描くことで、物語の質を高めていつている面がある。

(注5) 藤原の君の巻は、あて宮一四歳の夏までの記事が認められるかも知れない。年立の上で、田鶴の群鳥の巻と共に問題がある。

(注6) 宇津保に描かれた八七夕Vの行事は、物語文学としての初めての記事である。その内容も詳しく、七夕行事を考える上で重要な部分である。この点に

ついでには後に考察を加えたい。

(注7) 河野多麻氏「和歌と構想」(『日本古典文学大系』『宇津保物語』解説) 参照。

(注8) 藤井貞和氏は「物語の神話構造——〈異郷〉論ふう」(『『深層の古代』国文社、昭五三・四)において、かぐや姫が天上界へ帰る理由として、一つに「かぐや姫は『罪』の洗浄が終わったこと、もう一つは、帝からかぐや姫を出仕させれば位階を授けようと言われたことで翁が変心した、いわゆる「正直者の変心という」神話的なものの「パターン」によるとしている。示唆に富む意見で、あるいはあて宮の春宮入内も、それらと絡めて考えてみる必要があるようにも思うが、いまは措く。

(注9) 三谷栄一先生、注3同著。藤原の君の巻末で春宮が求婚者の一人として登場することで、春宮入内の方向が決定されたとする。

(注10) 注7を参照。

(注11) 菊の宴の巻末において、あて宮に失恋した実忠と、その妻子の物語を描く場面で、21首の歌が採用されているのもその証左であろう。

(注12) 拙稿「源氏物語における年中行事の役割」(『国学院大学大学院紀要』第五輯) 参照。